教訓
乳母物語
八編上下

京山老人作
一雄齋國輝画
嘉永辛亥春 蔦屋寿梓

九例

○艸ざうし八只曹の伽さうしゝあるべ一度読てその事ハ暁〳〵まをえと旨とまをされハ蜘手にすぢをくゝる事ハ古さべ

○艸さうしの文句混雑分乱して支の着別ろがなる言語のきこえざるさまにのりて戯場と観ごとく文句ハ混雑して作意と巧ふせんとその弊形りの多ふさのこと巧拙ハ知りつ捨るあり是ハ児こもちゆもさうしゝあんとくあり

○近来の艸ざうしハ北枝と分て上下ハ一編とし此内口繪といふめ二枚あると通例とまをべ文句ハ僅に十八枚形り然るを絵ハ七多の地をとゝまをべ文句ハ三分の所ふありされば心ひのありてをぞたらぎをえびめる花のふりひあく芝屋のちるに捨らまをんとあいぐハぢん

嘉永四年辛亥孟春上梓　八十二翁　山東庵京山

○瀧壺政宗由来

政宗八行光ゞ子ゆり本国八備前の国鍛工の上手なるよし鎌倉にきこえ建保三甲戌の春鎌倉君将軍実朝卿行光父子を召て鎌倉なる宅地をあたへ行光政宗父子かまくら殿の刀鍛治職ぜつむ行光没さ

のち政宗其職を継ぐ

今小路の稲の南くちのて

五代後堀河院の御時嘉禄元年乙酉十月鎌倉の将軍四代目頼経卿元服の時

曰りのあり

結城朝廣謀ー

る軍攻ふようて同三年

政宗ゆめのごと十根の太刀を作りむいづれも銘刀なる中ゆきをと切味れまぐれさると瀧壺と名づけて秘蔵せるたきを法ずとゆゑもうるもどうのあるあり同三年

奥州の朝の次男

三代目の実朝を刺殺ー

る

公暁

偽りて謀をなる日

の春うまくゆめて

かのたきつぼ政宗と

とも廣ようなる

とゆふようて

鎌城の家ホ

つくえーと△

十根の太刀を作る門人

政宗

稲荷へ

御酒へ

鎌倉
千歳判官
松葉ヶ谷
春國の
田君の
老女
亀
の井

佛正八が
塊
仁太郎
白露
や
さ
ら
別
あ
き
ば
木鼠五郎
力屋朝右衛門が
女お花
千代
半七

第一段

ゆうとくの四八
こゝろ目や
かぐ七

松風名げう
琴のでし
かれこゝろ
ゆきぞん

仁太郎

春吉があや
ひとけ正八
撥あろの
ちる吉

仁太
ゑとけ三八

つるまきの
さくらう郎
刀やさぶろうえもん
つれづれ お庄ろう
おもかげ花

五段
あさや
あさや
あさや
しらぎく

國輝画　京山作

教草子乳母草子八編

上冊

京山老人作

歌川國輝画

嘉永四年辛未春

嘉鶴堂 表榛

京山先人作

乳母ノ
忰チ
八編

上巻

森鶴堂梓

國輝画

下巻

九番仲

めいとのさゝし

八編下冊

京山老人作

国丸画

北尤板

九番仲八編下の巻

六段

つき　月やとくさとやふるあるあやうあり　十二味とうろ
ろあらひこ　水百人　新しんうう　一つ　百三十二せん　いろわどの
あまーやうあやあらちど　月やてかりれのつや　玉の
でくあうやうらけ合あり。あれがいとべらを。ゆけど
。あもあけ。ゆきまこに　ゆとつねふつえべかわわふあその
ようハタあり　女ちとうこ　菜男大あんゆく　陸奥冊　くらんあ
れうやく　ざい五分　年ざい　二分　六十。女八五十　八上ようを
月やてえる　内八ようあやうけあり　男八分ーらふあるを
らくーくとあもちんせのうろれふまさうをの月やようべー
。うちまのおうろい白丼　ぶか一つ　こ百六四せん
。大極上　こ吉おうろ　ものう六十四せん
。あくぬきえうあうろいけのやうう
五十二せんてんえうろうーべあふ
えびまうけあかあり

本文七段　かくてまを八分をりーどろふ
えうりあるーふかりひ
かに　ぶうまあいをごかーう　ありしあえ
やうちかえくうにあうをーやはさ
「ういせつのりのやをらやうう」　ゆどイで
でどうまーう　上くをまで
んどうをとまりてまををきうろう
▲それいさてときかの仁太くハ
ままむれをぬまこうろ　ホれうーをと
せんぎのうあ　ぶ昔ちくかーとをろり

㊁　ちまた　かけあちまあつさ　仁太ふのふ
仁　さあうをどぐうまに
とれはどろあそあさ　八
ちのしんのあまを
かちうくハぐしさ
ことけどや　半　され
ぐまちあれバあう
ねをのうたいとが
ちあちくゆる
とやりわの井
さあハひをーの
おでのりあく
ちうぐんの
ちをふが
とりふ
ままあの
のをうあを
ハ西ふが
おひうの
をへ味
だんあが
三千ぬの
ちあホ
ぬをホ
ゆけうんの

代　半七

かうあや
さやあのん

表おりそも大らををのをばくうれ
をうる九ひどうあうをうーぐあを
とあるとえたのかをう〜
くをのあう「かくぐ
よいう「あもあをどぐ
ぶうとうやをえいおちう
あうんとせんちんふ
あうくる仁太くうをく
らんのふおをり「れ
まをとをえうけを
をををう男が
あちくる白をの
らぐあうをとうを
月うぐあえううを
かれ　仁太　ゆを
よやあのう　ちんを
さうらひをあさ
ハ仁　ちをきをれ
をハあうをも
三あんあをま
たんあのうをせふ
わうをうし
仁ちーあや　半
ヲくをれく　㊀

つうひあを
ふのひる
三千あま
つまをく
ををくあち
をうけ　㊂

㊃　金まあを
をうをう
かををバ
ぬをんをふぢをえ
ぜちをいうれしは
ぐんあのいひうけふ
てををうある　つぎを

半七

仁太

八段

仁太郎
半七

おさよ
おさよ
仁太
きく
十段
さるまん

花女亀の井

仁太
休所

茶事
木村屋
五郎

千歳の判官
春國の母君
老女
亀の丹ふ
密事を
語り
給ふ

西八ぶゆをとる
十九

仁太
おなを西八

安政四年丁巳孟春新刊目録

松源實記

自九編至十四編　笠亭仙果作
當辰正月發兌　歌川國貞画

九編　惟規少將再度中將の計ひを聞て手妙ふ其兒と救ふ齋院御
使の行啓れ天変有正名鼠もち擒られて中將鳴高罪ふ伏す惟規住吉へ
御使ふ立三島江口ふ遊女香炉ふ値遇し室の笛を失ふ蓍屋の事　十編　同人
密ふ北越へ出奔の紫式部めぐりあひてうんぬんの歌に中来の宜孝丹生
使の時亂村の痕諸避く六田の茅屋ふ旧熟の婦と二子ふ再會帰洛の後まつ
宇佐へ赴く　十一編　六田の按手兒嫉妬ふ野洲子病く身ふ入兒姉の仇を復
さんとす紫式部一女子を産む後大貳三位賢子是なり此巻法皇ふつたへの話を
書収む　十二編　惟規北国流浪あつれなること多し紫式部寒帰ふ上東
門院ふ宮仕の顛末　十三四編　式部人女の忠貞こまやかふ記し御堂殿小野宮殿
の栄花賢才をすぐし出そ花あり實はあり御高評を希ふ

花兄弟陸奥名所　二冊

同作國芳画

芝神明前
喜鶴堂敬白

へ13
4450
8